

韓国の農村集落における高齢者の外出行動について
—韓国釜山市近郊洛東江下流凡万里の調査から—

山陽学園短大 久世 直子

【目的】日本では、高度経済成長期に自動車の普及により地方の人々の日常生活圏は拡大し、生活に大きな変化があった。本研究は、現在、経済成長が急速に進み変化しつつある韓国の農村における高齢者の日常生活の現状を、主に外出行動の視点で捉え、その特質を探ることを第一の目的としている。この研究は、韓国洛東江下流釜山市凡万里の農村集落を事例として、そこでの農耕生活文化の態様とその特質を、多方面の研究者が分担協力して究明しようとする研究の一部である。

【方法】調査は、1993年7月21日から1週間の日程で現地を訪れ実施した。65歳以上の人を対象に、韓国の大学教員及び学生の協力を得て、面接による聞き取り調査を行った。内容は、主に1週間の過ごし方と、外出先についてである。高齢者20人の事例調査と、後継者及び若年層からの補完調査を行った。

【結果】近年釜山市に合併したこの集落は、現在でも韓国洛東江流域有数の農耕地帯である。1970年代からの芹の栽培により急速に豊かになり、人々の生活に変化が起こった。その中で、高齢者の日常生活は、多くの場合集落内にとどまり、日常的には集落内の散歩、少々の農作業が屋外での活動である。日本で高齢者の日常生活で重要な外出先になっている、病院への定期的な通院はほとんどみられない。また、この地域の伝統的な住宅に風呂はなく、まだ風呂を備えていない家では、週に1、2回家族や近所の人達とバスや車で金海市の銭湯まででかける。釜山市中心部までバスで30分程の所に位置する集落だが、伝統的な農村の生活が残っているとみることができる。